

全部床義歯の痛み

—原因の解明と対策—



著 明海大学歯学部非常勤講師 丹羽克味

AB判/カラー/109頁/定価(本体6,000円+税)

ISBN978-4-7624-0678-2

- 痛くなく、なんでも噛める
そんな全部床義歯を、どのように作るか
その1点に的を絞った理論と技術の解説書
- 咬合採得印象法を用いた
コンプリートデンチャーテクニック

高価な咬合器を使って数々の測定を行い、天然歯よりも整った人工歯を排列した全部床義歯であっても、痛くて噛めない、患者さんにとって一銭の値打ちもありません。装着して痛みがなく、なんでも噛めることが、全部床義歯の最大の要件です。全部床義歯を安定させ、痛みのない義歯をどのように作るか、本書は、この一点に的を絞って解説します。

加えて、現行の医療保険制度の縛りのなかで、**経済的かつ時間的に、採算のとれる義歯**をつくります。誤解しないでいただきたいのは、本書で作製する全部床義歯は、決して安かろう悪かろうというものではないということです。著者の提唱する咬合理論に則ってつくられた義歯を装着した患者さんは、真に噛めることを実感されることでしょう。そしてその製法も、**きわめて簡便で失敗のない方法**です。本書では、多くのカラー症例写真を用いて、その手法と臨床的意義をわかりやすく解説します。

咬合採得トレー付き

主要目次

プロローグ

1 全部床義歯を安定させるには

—義歯が安定する真の理由と調整の狙い—

A 咀嚼反射が成立するように調整する

- 1 痛みがなく義歯で食事ができる真の理由
- 2 咀嚼反射の成立

B 下顎義歯に吸着作用が起こるように調整する

- 1 どんなに細い下顎義歯にも吸着作用は起こる
- 2 義歯に吸着作用を起こさせる3つの条件

2 全部床義歯の不快症状

—原因の診査と対策—

A 痛くて噛めない

- 1 痛みの部位を診査する
- 2 咬合を診査する
- 3 義歯の動きを診査する
- 4 義歯のたわみを診査する
- 5 歯槽堤と人工歯の排列位置を診査する
- 6 中心咬合位の垂直的顎位を診査する
- 7 中心咬合位の水平的顎位を診査する
- 8 咬合平面のレベルを診査する

B 下顎義歯が浮き上がる

- 1 義歯全体が浮き上がる
- 2 右側か左側が最初に浮き上がる
- 3 後方から前方に動くように浮き上がる
- 4 舌をあげると浮き上がる
- 5 義歯の浮き上がりを修復したあとに行うこと

C 上顎義歯が落ちる

- 1 義歯の動揺度を診査する
- 2 顎堤を診査する

3 義歯の床縁を診査する

4 義歯の落下を修復したあとに行うこと

D 食事がしにくい

- 1 上顎義歯の口蓋後縁を診査する
- 2 咬合高径を診査する
- 3 咬合を診査する

E 会話がうまくできない

- 1 上顎義歯の落下を診査する
- 2 前歯排列を診査する
- 3 口蓋部や下顎舌側のレジン床を診査する
- 4 上顎義歯の口蓋部後縁を診査する
- 5 咬合高径の高さを診査する

F 頬や唇を噛む

- 1 咬合を診査する
- 2 左右の咬合高径を診査する
- 3 咬合高径の低下を診査する
- 4 臼歯の咬合関係を診査する

G 潜在する審美的不満

3 4回の来院で義歯を完成させる

1日目 印象採得と咬合採得印象

- 1 印象採得
- 2 骨隆起部の確認
- 3 咬合採得印象
- 4 技工作業：模型の咬合器付着と咬合高径の決定
- 5 技工作業：咬合床の作製

2日目 咬合採得

—中心位と中心咬合位の確認—

- 6 咬合採得
- 7 技工作業：人工歯の排列

3日目 ワックス義歯の試適と前歯排列の修正

8 ワックス義歯の試適

9 技工作業：レジン重合による義歯の完成

4日目 新義歯の装着と咬合調整

- 10 新義歯の試適と床縁修理
- 11 咬合調整
- 12 新義歯のリベース

装着後 アフターケアとメンテナンス

- 13 新義歯使用後の不満
- 14 新義歯の装着と管理

4 全部床義歯安定の咬合理論

A 片側性均衡咬合の成立と咬耗の役割

B 中心位と中心咬合位の臨床的意義

- 1 中心位の定義
- 2 中心位の新しい定義
- 3 中心位の臨床的意義
- 4 中心位という顎位

C 顎位診断器の原理と診断的意義

- 1 従来の咬合採得法
- 2 顎位診断器の操作
- 3 顎堤と咬合平面の診査と臨床的根拠
- 4 通常義歯作製過程で行う顎位診断

D 咬合採得印象法の技術と臨床的根拠

- 1 咬合採得印象法の臨床的意義
- 2 咬合採得印象法の臨床的根拠
- 3 咬合採得印象法の手技
- 4 咬合採得 —正しい中心咬合位の確認—
- 5 咬合採得印象の失敗への対処

エピローグ

咬合採得トレー申込書

1日目 印象採得と咬合採得印象

1 印象採得

a トレーの選択と試適



図 3-1

全部床義歯の印象には、一般的に無歯顎用トレーが用いられます。しかし著者は無歯顎用トレーは使用しません。図 3-1 に示すような有歯顎用の全顎トレーを使用します。なぜ有歯顎トレーを用いるかというと、歯肉移行部を超えた位置まで印象したいことと、もう1つの最大の理由は、下顎義歯の舌側後縁を十分印象したいからです。この部は無歯顎用トレーで印象修正しなければなりません。しかしトレーの形態修正には技術が必要と、さらに義歯になったときに舌の舌側後縁となるかどうかの保証はありません。だとすればアルギン酸印象材の印象圧のみで印象した舌側後縁のほうが、はるかに真の形態に近いと考えられます。またトレーの形態修正をする手間が省けることから、有歯顎用のトレーを用いています。



図 3-2

実際のトレーの試適は口内で行いますが、要点は、図 3-2 に示すように上顎トレーは上顎結節まで十分に含んでいること、下顎トレーはレトロモラパッドを含んだ範囲まで印象できる大きさであることを確認します。

b 印象採得

印象に入る前に患者さんの体位について説明します。背板の角度は 60°~70 度前後の座位とします。次に按頭台の角度を調整して、頭をらせて顎が上がらないように、また口を開けたときに下顎咬合面がほぼ水平になるように固定します。次に印象採得に入ります。有歯顎トレーを用いて失敗なく印象を行うコツは、アルギン酸印象材を少しかために練ることです。どの程度のかたかさかという点、印象材を盛ったトレーを逆さまにして、ゆっくり振ってもこぼれない状態です。トレーを傾けると、印象材が重力で垂れ下がるのはやわらかすぎます。次に上下顎の印象採得の要点を記します。

2日目 咬合採得
—中心位と中心咬合位の確認—

6 咬合採得

a 咬合床の試適と咬合診査



図 3-19

咬合床を患者さんに試適して、咬合時の咬合状態を診査します。もし前回の咬合採得印象が中心位で採得されていれば、上下顎の咬合堤は、なんら調整することなく、びたりと合うはずですが。

図 3-19 に咬合床を試適した直後の状態を示します。上下顎の咬合堤が左右側で期間なく合致していることがわかります。また咬合床を装着した患者さんの顔貌は、図 3-20 に示すように口唇や鼻唇溝にゆとりがみられ、本来の中心咬合位の顎位で咬合していると思われます。



図 3-20

b 中心位と中心咬合位の一致の診査

口腔内で上下顎の咬合床の適合が確認されたら、中心位と中心咬合位の一致の診査を行います。診査は、まず上下顎の咬合床を口腔内で咬合させます。そして左右の第一大臼歯部の咬合堤に、上下顎にわたってエバンスのようなもので縦に線を入れます。

次に咬合床を咬合器上に戻して、上下顎咬合床を咬合させます。このとき患者さんの口腔内でつけた縦の線が縦線が、咬合器上でも一致していれば、中心位と中心咬合位が一致して採得されたことになります。

なぜなら上下顎の咬合堤が全面にわたって期間なく合致していること、そして噛み合った位置が口腔内と咬合器上とが一致していることは、中心咬合位が中心位と一致した顎位であることを示しています。図 3-21 に示



図 3-21



図 3-22

内容見本

3日目 ワックス義歯の試適と前歯排列の修正

8 ワックス義歯の試適

3 日目のおもな作業は、ワックス義歯の試適です。この操作では、どこに注意する必要があるのか、次に解説します。

a 臼歯部と顎堤の位置関係の診査

技工所から届いたワックス義歯の下顎を図 3-26 に示します。ワックス義歯で行う診査は、まず下顎義歯を、図に示すように後方からみます。みるポイントは、下顎第一大臼歯の咬合面中央と歯槽頂の位置関係です。歯槽頂の真上に、下顎第一大臼歯の咬合面の中央が位置しているか、やや舌側側に位置していることを確認することが大切です。この排列位置に関しては、先にバンドラインに従って下顎臼歯を排列するように説明しました。それに従って排列されているかぎり、この咬合関係は成立しているはずですが。

次に上顎臼歯の咬頭と下顎歯槽堤との関係をみます。上顎臼歯舌側咬頭の位置に関しては、30°~33 度の臼歯を用いて、1 歯対 2 歯咬頭の排列を踏襲するかぎり、必然的に下顎歯槽頂の真上に位置することになります。そこで上顎舌側咬頭と下顎歯槽頂の関係については診査する必要はありません。義歯を安定させるには下顎の人工歯と歯槽頂の関係が絶対条件です。

b ワックス義歯の試適と床縁の調整

ワックス義歯を患者さんに試適しますが、最初に診査するのが顎堤です。図 3-27 にワックス義歯を装着した写真を示します。比較のために旧義歯を装着した顔貌も提示します。ワックス義歯装着の写真では、旧義歯とそれほど違いのない顔貌にみえます。しかし新義歯では、最後に行う咬合調整で臼歯を脛合します。したがって咬合高径は下がるので、このままにします。

次に基礎床の床縁診査を行います。基礎床が即時重合レジンなどで作製されていると、ワックス義歯の試適のとき、上顎義歯が落下したり、下顎義歯が浮き上がるなど安定しないことがあります。

その理由は、基礎床の適合が悪いこと、また基礎床の床縁が適正でないためです。したがってワックス義歯の試適に際し、床縁が大きくて安定の

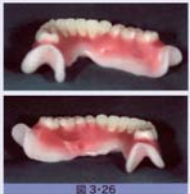


図 3-26



ワックス義歯装着時の顔貌



旧義歯装着時の顔貌

図 3-27

4日目 新義歯の装着と咬合調整

10 新義歯の試適と床縁修理

最終日の 4 日目は、新義歯の咬合調整に入る前に新義歯を装着した顔貌診査と、義歯床の修正を行います。

a 新義歯装着による顔貌の診査

図 3-32 に技工所から届いた新義歯を示します。また装着した顔貌を図 3-33 に示します。写真をみると咬合高径が少し高いように感じますが、これは咬合調整によって低くなるので、そのまま次に進みます。

新義歯の試適では、上顎義歯と顔貌の正中の一致、前歯排列の口元との調和などを診査します。ベクトル咬合理論では、6 前歯の切端も脛合するので、口元も変わってきます。

b 上顎義歯の床縁修正

◎義歯床が大きい場合

上顎義歯を装着します。大きく口を開けて義歯が落ちるかどうかが、また上唇を伸ばして義歯が安定しているかどうかを診査します。もし義歯が落ちたり動いたりするときは義歯を安定するようにします。方法は 2 章 c 節で説明しましたが、ここでもう一度説明します。

まず義歯床縁と歯肉移行部について過剰部分の確認をします。左指で咬合面を押さえ粘膜に押しつけるようにして確認します。そして右指で口唇や頬粘膜を引き下げます。このとき左指に義歯が浮くような圧が感じられるときは床縁が大きすぎるので、そこで右指で引いた部位に相当する床縁を削り、圧が感じられなくなるまで調整を繰り返します。

◎義歯床が小さい場合

義歯床全周をミラーで確認して床縁が歯肉移行部より小さい部分には、即時重合レジンを用いて床縁を延ばします。たとえば図 3-34 に示すように前歯部の床縁が極端に印象不足の場合でも問題はありません。床縁の足りない部分は、即時重合レジンを追加して床縁を形成します。とくに矢印で示す上顎結節部は、義歯の安定にとって重要な部位です。床縁不足のないようにします。

上顎義歯の安定のポイント、歯肉移行部と上顎結節部を過不足のない



図 3-32

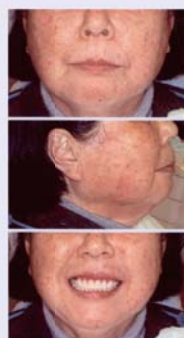


図 3-33